

## 【調査報告】

# 園田学園女子大学×神戸大学 歴史・文化シンポジウム 「生活の記憶をつなぐー地域歴史遺産の記録ー」

人口減少、少子高齢化が進むなか、地域のコミュニティーが衰退し、文化遺産を維持することが困難な状況が続いている。そうしたなか、2019年に文化財保護法が改正され、文化財を「まちづくりに活かしつつ、文化財継承の担い手を確保し、地域総がかりで取り組んでいくこと」が目標とされた。本学では、大学COC+事業以来、地域に多様に存在する文化遺産を「地域歴史遺産」ととらえて検討を加えてきた。しかし、兵庫県下においても「村じまい」「村おさめ」といい歴史を刻んだ地域が、跡形もなく消えてしまう状況が現実化するなかでは、やがて消滅する可能性のある「営みの記憶」を記録に残し、アーカイブ化することが重要である。

この報告は、2025年2月8日にひょうご神戸プラットフォームの事業として、本学が神戸大学地域連携推進本部と共催で開催したシンポジウムの記録である。このシンポジウムでは、兵庫県下の複数の地域で地域歴史遺産の保全活動に取り組んでこられた神戸大学大学院人文学研究科特命講師の井上舞氏、過疎地域の生活の知識継承に基づくデジタル・アーカイブの構築に取り組んでおられる兵庫県立芸術観光専門職大学准教授の藤本悠氏にご報告いただき、地域歴史遺産の記録化について議論したものである。

## 【趣旨説明】

大江 篤  
(園田学園大学学長)

シンポジウム開催の経過と趣旨説明をいたします。今回『生活の記憶をつなぐー地域歴史遺産の記録ー』というテーマで、記憶の記録化について、本学が長年お世話になっている香美町小代区の事例を中心に、民俗学の立場でどのようなことをやってきたのかというお話をしたいと思います。



本学園(学校法人園田学園)と北但馬地域の関わりは、非常に古い時期からのことです。現在の香美町が美方町、村岡町、香住町というに三つの町に分かれていたときの美方町の町長と、先々代の理事長一谷定之齋が深い関りを持っていました。現在、小代地域局の倉庫に保管していただいています。牛のブロンズ像(エウリベ)を本学園が贈呈しています。1970年代から但馬地域と尼崎市をつなぐというビジョンを学園が持っており、小代地区には、それ以来ずっと交換留学生や学生たちの受け入れをいただいています。

この一谷定之照先生の『春風 追悼集 一谷定之照の生涯』（園田学園、1992）に次のような一節が出てまいります。

…リーダーの中心に前垣憲一郎君いうて、元気なのがいてねえ。がんばり屋で京都の佛教大学の通信教育を受けて卒業した。その卒業論文で「尼崎市と美方町の合併」というどえらい構想を打ちあげよってねえ。この時は、兵庫県をひいて園田学園にいたんやが、相談に乗って下さい、いうてやって来た。「この先、過疎の町が生きていくには、どこかと合併するしかありません。しかし隣の町と合併しても、同じことで、過疎は変わりません。第一、お互いに人を抱いて泳ぐほどの力がないんですから…」…若い人の熱意にほだされた形で、尼崎市との橋渡しを約束しましてねえ。…直接、野草市長にもこの話をしたんです。…元はといえば、若い人の夢ですよ。この橋渡しでとうとう、行政レベルの話し合いにまで発展して来た、その結果、生まれたのが、「尼美会」。正式には「尼崎市と美方町の親善を深める会」ですよ。

これ以来、今に至るまで尼崎市は旧美方町（香美町小代区）とつながりを持っています。2017年に閉店になりましたが、阪急塚口駅前に香美町のアンテナショップ「ふるさとステーション香美町」がありました。また、毎年、尼崎市の子どもたちに香美町からトラックで雪を運んでいただく雪国体験もやっています。さらに、香美町小代区に尼崎市立美方高原自然の家「とちのき村」という宿泊施設があります。自然学校で尼州市の児童が小代の方々にお世話になっています。阪神間の都市部の尼崎市と多自然地域の香美町をつなぐという長い間の両地の関係性をつくったきっかけは、1人の大学生の卒業論文、その構想を本学園の一谷定之照が受け止めて、野草市長と一緒に構想され、現在に至っているというところでございます。

2004年度から、私の研究室では、多自然地域の生活の記憶をどのように残していくのかというテーマで、兵庫県地域振興課の「絆プロジェクト」に採択され、取り組んでいます。また、私は香美町文化財保護審議会や香美町文化財保存活用地域計画協議会の委員長に就任しています。

兵庫県教育委員会は、高度経済成長期の1960年代から、過疎化やダムで水没する集落を対象とした緊急民俗調査報告書を出しています。

香美町域では、『兵庫県民俗調査報告 2 小代：小代地区民俗資料緊急調査報告書』（兵庫県教育委員会、1970）と『兵庫県民俗調査報告 5 但馬海岸：但馬海岸地区民俗資料緊急調査報告書』（兵庫県教育委員会、1974）の二冊の報告書が刊行されました。この報告書にはたくさんの写真が掲載されています。山仕事や雪かきの道具であったり、生活の風景であったりというものです。『小代』には藁人形を作ったお正月の行事があったと報告書にあります。しかし、その行事自体を記憶されている方は、現在の小代区には残っていません。写真や報告書に書かれている内容がさっぱりわからないのです。報告書は、当時の古老からの聞き書きをまとめたものですが、それを読んでも行事が復元できないというような状況もあります。

その一方、写真の行事で使用された道具が残されているものもあります。「嫁の尻張り」という子授け祈願の行事です（写真①）。子孫繁栄のために、新しく新婚でお嫁に来られた方が晴れ着を着て、小正月（正月15日）に、この藁の苞でお尻を叩くという行事です。この藁苞について、記録がなく、物だけが残っていたら、将来、汚い藁で編んでいるロープなので焼却処分してしまわれたでしょう。写真があり、記録があれば復元することも可能となります。



写真① 嫁の尻張り（『小代』より）

このような民具は多くの自治体で保管されています。たとえば、蓑笠ですが、使用経験のある方に使い方を教えてもらったことがあります。この蓑にはタグが付けられており、制作した方のお名前と嫁入り道具として娘に持たせたものであったことが書かれています。このタグがなければ、ただの昔の道具にしからずがないということです。生活用具は物だけが残っていても何に使っていたかは分からないということになってしまいます。そこに記録がともなうことが重要だという理由があります。

また、民俗芸能については、『文化遺産を活かした地域活性化事業報告書 平成27年度 但馬の民俗芸能 風流』（兵庫県教育委員会、2016）、『文化遺産を活かした地域活性化事業報告書 平成28年度 但馬の民俗芸能 ダンジリ・三番叟』（兵庫県教育委員会、2017）の2冊の報告書があります。その調査地の小代区新屋という集落ですが、寿式三番叟（兵庫県指定無形民俗文化財）と村芝居が伝承されています。村芝居は、毎年、新しい台本を書いて練習されています。現在は、営農館という農機具庫に、照明設備や緞帳も設置されています。もとは神社の境内に舞堂（農村舞台）があり、屋外で、野掛けで見ていたということをお聞きすることができます。

舞堂は保存されているだけですが、回り舞台の装置が残っています。この場所では、盆踊りも行われていたようです。

新屋では、古い写真を見せていただきました（写真②）。今は2名の男性が三番叟を踏んで（三番叟の舞は「踏む」といわれる）いますが、10代の女性が2人で三番叟の衣装を着ている写真です。写真の裏には男性の名前は書かれています。女子2人の名前は分かりませんでした。たまたま舞堂を見学に行ったときに、おばあちゃんがいらっしやって、自分がこの写真のとき



写真② 香美町新屋の寿式三番叟

に踊ったと教えていただきました。

いろいろお話を聞いていると、第二次世界大戦中、男性が戦地に向かいお年寄りと女性、子どもしか村に残っていないなか、それでも祭りを続けていくに当たって、女性が舞うことで継承してきたということが分かりました。近年、少子高齢化、人口減少で廃絶した祭礼、芸能もあります。また、コロナ禍での休止をきっかけに途絶えたものもあります。そのようななかで、新屋の三番叟は、いろいろな工夫をしながら継承してきているのです。その痕跡が1枚の写真から理解でき、伝承者のお話からも分かります。通常は、村の方に集まっていた聞いて聞き書き調査をやるのが民俗学の調査のやり方です。ただし、聞き書きの記録が生かせる記録かという点、なかなかそうならないということも大きな課題です。

また、香美町教育委員会が刊行した『小城追憶－小城民俗調査報告書－』（香美町歴史文化遺産活性化実行委員会、2014）という報告書があります。1984年に集団移転をした村岡区小城に甲南大学の学生が調査したものの刊行されなかった原稿が残されていました。その原稿を刊行すると共に、2012年にもう一度民俗調査を実施し、まとめていくという方法で、追調査を行っています。

さらに、『小代』に使用された写真が小代地域局に保存されていました。本日お見えの神戸大学の松下正和先生に写真の保存処理をしていただき、デジタル化していただきました。

『小代』の調査地の一つ、熱田という集落は、1968年の冬に3人の女性が雪崩で巻き込まれて亡くなってしまったことをきっかけにして、村を去り、集団移転をすることになった集落です。

写真③は、冬場だけ越冬住宅に行くときに牛も一緒に連れていった時のものです。集団移転で村を去るときのことを思い起こされる写真でもありました。当時を体験された方は、本当に泣く泣く村を振り返りながら去って行ったという、そのときの気持ちを聞かせていただいたことがあります。また、熱田には分校があり、行事や越冬で本校に行った際、分校から来た児童に対して、本校の児童がどんな対応をしたのかという、いろいろな思い出を聞かせていただきました。

この熱田は移転先の集落での居住者がお一人になられて、2020年に自治会を解散されました。現在、中学生まで移転前の熱田で暮らしていた吉田真佐子さんが廃村の語り部となって、かつての暮らしを伝えようとされています。畜産業者さんと一緒になって、「和牛のふるさと」（日本の和牛の99.9パーセントのDNAは、熱田の田尻号という一頭の牛から始まった）として畜産業者さんたちの聖地となり、廃村を観光資源として案内をされています。

本学では、絆プロジェクトで航空写真や写真を見せていただきながら、聞き取りをすすめているところです。また、昨



写真③ 移住のため但馬牛を引き、荷物を背負って約10キロの山道を越冬住宅へと向かう住民  
=1969年12月25日  
(吉田真佐子さん提供)

年の秋に熱田集落を歩いたのですが、雪崩で亡くなった方の供養で作られているお地藏さんがあり、吉田さんのおうちには、藁ぶき屋根の家だったときの写真が置かれています。また、電気が通っていなかったので自前で水力発電を設置された跡や神社が残されていました。さらに、分校とお堂が残されています。お堂の中には、耳が聞こえるように祈願した石がぶら下がったままで置かれていたり、お盆のときの灯籠が残されていたりします。

小代区にはもう一カ所「小長<sup>こながたわ</sup>迪」という集落があり、ここも熱田とほぼ同時期に廃村になっています。この集落は、現在、林道で上がることができます。お墓と廃屋が残っています。小長迪の場合は、集団移転ではなくて、小代地域局の周りの集落にばらばらに各家が移転され、自治会のつながりはなくなってしまいました。旧村と新しく入った集落の自治会費が二重に取られることになったことや、分校から転校したときに本校の子どもたちにいじめられたという出来事もあり、つらい思いをしたお話などを、聞き取りをすれば、まだ今なら何とか聞ける状況です。

こういった生活の記憶をどのように記録化していくのかというのを、今日、お二人の先生のお話を聞いて学んでいきたいと思っています。兵庫県文化財保護審議会で、平成27年に作った提言があります。この提言の中で7つ項目を挙げていますが、その中の「営みの記憶を残す」こと、人の暮らし、社会の履歴が消滅するのが現実、目の前に来ているので、これが今、現代の社会において熟考すべきと述べています。それが地域を愛する人づくり、魅力ある地域づくりにつながっていくのです。（「地域の文化を発展的に受け継ぐために－地域の持続可能性に文化が果たす役割－」兵庫県文化財保護審議会、2015）

そして、兵庫県下41の市町それぞれが、現在、文化財保存活用地域計画を立てています。その計画で香美町は、唯一、計画の目標、アクションプランで「ふるさとの記憶」という項目をたて、廃村集落の歴史文化を将来に伝承および継承していくために大学等の関係機関と連携して、住民の負担が少なく効率的に歴史文化の特徴が把握できる調査記録方法を開発することをあげています。（『香美町文化財保存活用地域計画』2020）このアクションプランを今後どのような進めていくことができるのかが本シンポジウムの大きなテーマだと考えているところでございます。

香美町教育委員会は、集落ごとに子どもたちにも分かるような「ふるさとガイド」を小学校区ごとに作成しています（計10冊、2008-2023 <https://www.town.mikata-kami.lg.jp/www/contents/1387257760137/index.html>）。しかしながら、各集落にあった小学校も少子化のなか将来的には旧3町の3つにまでに削減される予定です。地域歴史遺産を子どもたちにどのように伝えていくのかということを考えていかなければなりません。

それから、但馬地域にはジオパークもあります。ユネスコに認定されている山陰海岸ジオパーク（<https://sanin-geo.jp/>）では、自然の地形と人の暮らしが関わっていることから、ジオパークのパンフレットにおいて、地域歴史遺産が取り上げられることもあります。例えば、小代区の久須部川の「滑床」、地元では「ナメ」と言われる地形があります。

「ナメ」（滑床）は火山で形成された一枚岩の川底ですが、ここはかつて洗濯場だったことを教えていただきました。聞き取りをすることで、子どもの頃、洗濯機がまだ入る前に、この川の滑

床で足踏み洗濯をしたり、水をくみに行ったりしていたことが分かりました。大変な作業で、お母さんのお手伝いをしていただけたけれども、そのときのほうが親子のコミュニケーションが深かったと言われました。家電製品の洗濯機が入ってくることによって、家事労働や生活が大きく変化したことが理解できます。生活の変化にともなう、生活実感はなかなか伝え難いし、伝えないといけないことだろうと思います。

そういう思い、記憶については、写真と言葉でこれまで民俗学が報告書にまとめてきました。しかしながら、現在その報告書を読んでも何だったのか分からない、追調査を行い聞いても分からないというようなものがある点が大きな課題だろうと思います。

民俗学の対象は日常生活の当たり前のことです。こんな意味があるから、この行事をやっていますではなくて、この行事、こんな思いで、こうやっていたということのほうが大事だと思います。それから、宮本常一が柳田國男の『遠野物語』を読んで、次のようなことを言っています。

『遠野物語』を読みまして私自身がいちばんびっくりしたことは、じつはそこに出てくる話は、内容は違いますが、われわれ子供のときにしょっちゅう聞いておった話なんですね。それが書かれている。しかもそれがわれわれからしますと、ひじょうに簡潔な美文なんですね。われわれは、そういう話のごくありふれた話なので、つまらないものとおった。それがそうではなかった。そして、こういうふうに表示すればそういうものになるのかという、そういう驚きがあつたんですね。…そうしてこういうものが学問の素材になるのかということをはじょうに強く考えさせられたんですね。

…これならばおれのところにもあるぞー

伊藤幹治・米山俊直編『柳田國男の世界』（日本放送出版協会、1976）

当たり前でつまらないもの、よく調査に行くと、「私たちの話を聞いて、先生、何になるのですか」とか「聞いてもらっても意味ありませんよ」とかと言われることがあります。大切だと知られてないのだけれども、実は、それが大事な記憶資料であって重要なものなのだということです。廃村、「村じまい」というのが現実化していく中で、このような記憶の継承が重要なことではないかと考えているところがございます。

宮本常一は、伝統を守るというのは人間のエネルギーのことなのだというようなことも申しています（宮本常一「生活の伝統（1978年5月、青森県での講演）」、『炉辺夜話』河出書房新社、2005）。実際、記憶は記録しないと消えてしまいます。記録することで人々の記憶にも残っていきます。当たりの原風景、原感覚を、どこまで現代の技術の中で記録できるのか、何をどう残していくのかということが、まさに地域歴史遺産の保全活用というときに求められている中身だろうと思います。

最近、アメリカでは、記憶を記録化する立場の人たちを養成することの重要性が言われています。ブローカリング・カルチャーといい、地域歴史遺産を第三者的に、当事者ではなく、遺産と

遺産の間の中間に立つ人物（媒介者）です（俵木悟「思いをつなぎ、人をつなげる文化財」『職場・学校で活かす現場グラフィー』、明石書店、2021）。できる限り当事者に寄り添う立場で活動する人です。廃村（「村じまい」）の場合はなくなってしまった所だけでも、生活している方が集落ににいるということを前提で考えていきます。

今、兵庫県地域振課（兵庫県「持続可能な多自然地域プロジェクト」）は、多自然地域の伝統文化の継承、地域資源の保全は「守りの対策」としてまとめています。一方で、地域が活性化できる「攻めの対策」として、地域運営組織の形成をめざしています。小学校区にある二つの集落を1つにまとめる施策ですが、実現するには困難が伴うと思っております。本日のシンポジウムは、活性化というよりは、本当に、もう消えざるを得ない状況になっているところをどう残していくのかという視点で、お二人の先生がたのお話を聞いて議論を深めることができればと考えているところでございます。

少し長くなりましたが、以上が私のお話です。どうぞご清聴ありがとうございました。

## 「村の記憶」を「地域の歴史」へー兵庫県朝来市の活動事例からー

井上 舞

（神戸大学大学院人文学研究科特命講師）

本日は『「村の記憶」を「地域の歴史」へ』というタイトルで報告させていただきます。タイトルが少し抽象的ですので、本題に入る前に補足しておきます。

まず「村」について、これは現在の行政単位である市町村としての「村」ではなく、江戸時代の村の枠組みが現



在に引き継がれた自治組織を「村」と位置づけています。次に「地域」ですが、先ほど説明した「村」と日常的に関わりを持つ村々を含めた範囲を「地域」としています。

先ほど、大江先生のほうから、兵庫県内の過疎地域の話がありました。今日はそうした過疎が進む「村」の記憶をアーカイブした上で、それを「地域」の歴史に落とし込んでいこうとした試みについての事例をお話していきます。

まず簡単に自己紹介させていただきます。私は2011年度より、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターで勤務しています。本学の各研究科に置かれた地域連携センターでは、兵庫県内の各自治体と様々な連携事業を展開しており、人文学研究科では主に地域歴史遺産の保全・活用に取り組んでいます。私の大学院時代の専攻は国文学でしたが、ご縁があって地域連携センターで働くことになり、今は歴史学にも関わっています。私の主な仕事は、地域の歴史研究その

ものというより、地域に残された歴史資料を地元の方と一緒に整理して、歴史や歴史資料について知ってもらうこと。それを足がかりにして、地域の歴史を後世に継承する仕組みを皆で考えることです。現在は、福崎町・朝来市・丹波市・加西市、それから神戸市北区でこうした活動に取り組んでいます。

今日は、連携先の一つである朝来市における、過疎地域での活動や、ダムの建設によって移転を余儀なくされた地域の歴史資料の保全活動についてお話しします。

本題に入る前に、朝来市の基本的な情報について確認しておきます。兵庫県朝来市は、2005年4月に朝来郡生野町・同朝来町・同和田山町・同山東町が合併して誕生した自治体です。朝来市のホームページで確認したところ、2024年12月の時点で、世帯数1万2232世帯、人口が2万7754人と出ていました。先の4町のうち、和田山町はまだそれほどでもないのですが、生野町・朝来町・山東町では過疎化が進んでいる地域があります。

神戸大学と朝来市は、2005年3月に市町村合併前の生野町との間に全学協定を締結しています。同年4月に生野町は先の4町と合併して朝来市となりましたが、協定はそのまま朝来市に引き継がれています。その協定に基づいて、本学の各研究科が連携事業に取り組んでいます。工学研究科では建築物の調査、国際文化学研究科では観光関係の部署と連携として、観光PR動画の作成などに取り組みました。一方、人文学研究科では地域連携センターが中心となり、地域歴史資料の調査を行っています。朝来市域の中には、まだ膨大な未調査の古文書が残されています。これらの古文書を整理して、保管状況を整え、場合によっては展示会等で活用して、将来的に残していく活動を進めています。そして地域連携センターの方針として、活動の多くは大学だけではなく、地域の方を巻き込んで進めるようにしています。こうした調査の一環として行ったのが、朝来市生野町白口での歴史調査です。

生野町には中世から昭和中期頃まで採掘が行われていた生野鉱山があります。江戸時代は、銀山が幕府の支配下に置かれていて、その麓に銀山町が形成されていました。7つある銀山町のひとつが白口です。白口の周辺にはたくさんの坑口があって、江戸時代には大変栄えた地域で「白口千軒」と言われていました。『銀山旧記』という、銀山の歴史を叙述した資料があります。これによると慶長頃（1596～1615）には白口に880軒の家があって、呉服商・小間物商のほか日用品は全て揃うほどに様々な店が集まっていたと記されています。同書には伝承も多分に含まれているので、記述内容が史実であると言い切れないのですが、多くの方が住んでいたことをうかがわせる遺物が残っています。例えば江戸時代の墓石が沢山残っていて、平成の初め頃には地域の方によってそれらの墓石を集めた慰霊塔が作られています。これ以外にも白口集落の周辺にたくさんの墓石が確認できます。

明治時代以降も「白口千軒」とまではいかないまでも、住んでいる方はおられました。生野鉱山は昭和48年まで採掘が行われていて、ここに勤務する方も多くいらっしゃったようです。若林坑という坑口があります。江戸時代には有数の銀を産出した坑口ですが、昭和の頃は採掘ではなく、ここから鉱山事務所のある金香瀬に通うための通勤路として使われていました。普通の道

を使うよりこちらのほうが早かったそうです。しかし、徐々に人口が減少し、過疎化が進んでいます。

私が、この白口の調査の依頼を受けたのは、2016年頃です。生野銀山の歴史を考える上で重要な場所であるにも関わらず、このままでは何も残らなくなってしまうということで、教育委員会の方と調査を実施しました。私自身は地域全体を対象とした調査の経験はありませんでしたが、とりあえず取れる記録を取っていこうということで、集落を歩き回って写真を撮影したり、関係資料の調査をしました。それから幸いなことに、当時御年93歳で、生まれた時からずっと白口に住んでおられた方がいらして、昔のこともよく憶えておられて、その方から聞き取りをすることができました。

まずはそのとき残っていたものを記録していきました。次に、その成果を白口周辺地域の方に知っていただくために、展示会を企画しました。展示会といっても、会場は博物館や資料館ではなく、白口が所属する自治協議会の建物の一室です。机を並べて、そこに資料を置いて、ビニールシートをかけて展示を作りました。現物を展示できるものは現物を展示して、状態が悪いものや他地域の関連資料は写真を撮影して印刷したものを展示しました。とにかく見せられるものは全部みせてしまおうというコンセプトでした。

聞き取り調査の成果も展示しました。白口集落の白地図を拡大コピーして、そこに先ほどの無縁塔や石碑などのランドマーク的な場所の写真を貼り付けました。その上に、聞き取りで得られた情報や、資料から得られた情報を貼り付けて「白口歴史探訪マップ」を作りました。また、展示期間中に「白口歴史探訪マップ」の横に付箋を置いて、白口に関する情報を記入して貼り付けてもらうようにしました。

結果的に付箋については、自主的に書いてくださった方は少なかったのですが、来場された方が口々に白口に関する自身の思い出話を語ってくださり、そこで新しい情報を記録することができました。展示会には白口の住人だけでなく、以前白口に住んでいた方やその子孫の方、白口の周辺に住まれている方、それから配達などでよく白口を訪れておられた方など、周辺地域の方も多く来場されていました。そうした方から「外」から見た白口の話や、自分たちの住んでいる集落と白口との関係などを聞くことができました。白口での聞き取りは、聞き取りができる年齢層が限られていましたが、展示会には比較的若い方も来場されていて、年代による変化を知ることができました。例えば、白口集落から生野の中心部に降りていく途中に鉱山住宅があって、転勤で生野に来られた方が多く住まれています。白口のように古くから住んでいる人が多い集落と、新しく来た人が住んでいる集落の関係性が、世代によって変化していることもうかがえました。

この展示会をやって良かったのは、白口やその周辺地域の方が、白口についての思い出を共有しあえる場を提供できたことです。もっと広範囲を対象にしていたら、こういう形にならなかったと思います。これがきっかけとなって、展示会の後に、地域おこしに熱心な方が白口へのハイキングを企画されて、道中の解説を引き受けたこともありました。

コロナ禍もあって、その後は継続的に活動できていないのですが、引き続き、白口の歴史アーカイブを進めて、それを周辺地域の歴史にうまくつないでいけるような方法を考えていきたいと思っています。

もうひとつ朝来市の連携事業に関して、まだ実践には至っていませんが、関心を持っていることとして、ダム建設等による集団移転を余儀なくされた集落の問題があります。

朝来市には幾つかのダムがあります。その中で、建設に際して集落の移転があったダムが2つあります。それが生野ダムと多々良木ダムです。

生野ダムについては、先ほど大江先生のお話の中で民俗資料調査の話がありました。治水対策・上水道・工業用水・灌漑用水の補給等を目的として建設され、1972年（昭和47）に竣工しています。ダムの建設地には上生野と書いてコウジクノと読む集落がありました。この上生野と魚ヶ滝の一部、約60戸が水没・孤立するため、立ち退き移転が行われています。このとき、兵庫県教育委員会による民俗資料調査が行われて、報告書が作成されています。兵庫県のホームページに「生野ダム50年の歴史」というコンテンツがあります。そこには水没前の集落の写真も掲載されています。余談ですが、30年ぐらい前にこの地域が大変な水不足になった時期があって、生野ダムの貯水量が極端に下がったことがありました。そのときに、ダムの底を見たことがあります。当時は、まだ家があった場所や田畑のあった場所が一目でわかるほどきれいに残っていました。

もう一つ、生野町の北側に朝来市多々良木という地域があります。ここに関西電力が発電を行うためのダムを建設しました。これが多々良木ダムで、1974年（昭和49）に竣工しました。ここは、江戸時代は奥多々良木と口多々良木という2つの村で、明治時代に合併して、多々良木村となりました。移転対象になったのは、奥多々良木の24戸です。このときも、朝来町教育委員会による民俗資料調査が行われて、報告書が作成されています。

多々良木ダムが集落移転を伴うダムであったことを、私は長らく知りませんでした。2017年度から5年かけて、連携事業の一環として、地域の方と一緒に多々良木地区の区有文書の整理・調査を行いました。そのときに奥多々良木村が集落移転したということを知りました。区有文書の中に、奥多々良木村関係の資料がいくつかあって、それを整理する中で集団移転のことを知った次第です。その後、ダム建設のために移転された方の自宅に古文書があることがわかり、調査させていただきました。

こうした事例にあたったときに、ふと、移転を余儀なくされた集落の、移転前と移転後の連続性について考えました。先の個人宅の資料ですが、古文書が残っているということは、当時の所蔵者が移転の際に廃棄せずに持ち出されたということです。ただ、移転前・移転時を知っている現所蔵者はともかく、それ以降の世代になると、先祖の住んでいた土地に対する関心は薄くなっていきます。所蔵者の方からも、将来的には処分も念頭にあるというお話を伺いました。

この調査がきっかけとなって、少し意識的にダム建設による移転集落の情報を集めるようになりました。それで先の二つの報告書にも目を通すことになりました。これらは「民俗資料調査」

の報告書なので、家の間取りや、地域に残っていた言い伝えなどの、民俗に関する情報はたくさん記載されています。けれど、地域の歴史的な変遷、つまり移転前の集落がどのような歴史を辿ってきたかについては、ほとんど書かれていませんでした。もちろん、こうした民俗調査が行われるのはとても大事なことで、そのために残った情報もあります。ただ、これは1970年代のダム建設時にあった集落の記録であって、それ以前の集落のこと、ダム移転時のこと、移転後のことといった、集落の連続する歴史のことがわからないのです。

こうした集団移転を余儀なくされた地域について、残された文献資料や、あるいは集団移転の当事者の方への聞き取り調査などを通して、移転前と移転後の集落の歴史をつないでいく必要があるのではないかと思います。

そろそろまとめに入ります。ここまで、朝来市の過疎地域、そしてダム建設による集団移転の事例を紹介してきました。課題は、こうした「村の記憶」をどうやって「地域の歴史」に落とし込んでいくかということです。そのための取り組みとして、ひとつはアーカイブを続けていくことだと考えます。そして、大江先生も話されていたように、単に記録するだけでなく、後の時代に伝わるようなアーカイブを残していかなければいけない。これは本当に大事なことだと思います。

それに関連して、文献資料を扱う立場としては、集落に残されていた歴史資料をどうやって守り、継承していくのかを考える必要があります。先ほどお話しした個人所蔵の資料は、幸いにも調査することができましたが、散逸したものも多いはずで、集落で保管されていた区有文書や個人の所蔵文書、全て含めて、どのように残していくかが非常に大事になってきます。こうした問題は、大学だけで取り組むのは限界がありますので、行政や地域の方にもご協力頂きながら進める必要があると思います。

さらに、残された記録をどうやって活用していくかです。過疎化が進んで、一つの集落が消滅することを止められない状況がある。その中で私たちが出来ることは、その集落の記憶を地域歴史遺産として、その周辺地域も含めた歴史の中に位置づけていくことではないかと考えます。私自身もまだこうした過疎地域や、集団移転地域の歴史的な問題については、取り組みはじめて間がなく、どうやっていけばよいのかを考えているところです。今回紹介した幾つかの事例について、皆さまからご意見をいただきたいと思っています。

報告は以上となります。ありがとうございました。

大江 井上先生、どうもありがとうございました。朝来市の事例、今、実際に入られている中で、最後にまとめられた、その大きなエリアの中で位置付けていくというふうなこと、それから残されたものの、将来に、後の時代に使えるようなアーカイブというようなところも大きい課題なのかなというふうに思います。

では、ちょっと長丁場になりますが、引き続きまして、芸術観光専門職大学の藤本先生のほうから、ご報告をお願いしたいと思います。

## 地域資源のアーカイブと利活用に向けた取り組みについて

藤本 悠

(兵庫県立芸術文化観光専門職大学准教授)

芸術文化観光専門職大学の藤本です。今日は『地域資源のアーカイブと利活用に向けた取り組みについて』ということで、お話をさせていただきたいと思います。

まず、最初に自己紹介からさせていただきたいと思います。現在、私は芸術文化観光専門職大学という豊岡に新



しくできた大学にいます。元々、学部では考古学の専攻だったのですが、私の指導教官の先生がレバノンで発掘調査をしていて、そのレバノンの発掘調査のときに GPS を担ぐというのが私の最初の仕事でした。それがきっかけで GIS とか GPS の研究を行うようになり、そのまま地理学に転向しました。

さらにその後、同志社大学に文化情報学部というのができまして、その最初の博士課程の学生として所属し、そこでデータサイエンスを学び、その後、今の大学に移って、現在では情報学の教員として教育研究に携わっています。

現在の大学に移って直後に、今度は、スキーで大けがをして危うく死にかけまして、それで長期入院していたのですが、その入院がきっかけとなって、最近では、ちょっと医療のほうに今日覚めまして、肝硬変とかがんとか病理学のほうの研究にも携わるようになっていきます。

いろんな分野に関わってきたのですが、軸としては、要するにデジタルデータを扱うというのが軸にあって、デジタルデータを扱うということの専門家として今に至ります。

私自身よりも、実は但馬地域を売り出すというのが私の重要なミッションなので、ここからは「自地紹介」ということで、但馬地域のことをちょっと簡単に紹介していきたいと思います。

先ほど、お話に出てきた朝来市があって、私たちの大学は豊岡市にあります。豊岡駅近くのこの所に新しい大学ができたのです。駅から徒歩 5~6 分ぐらいですかね。城崎温泉がすぐそばにあって、城崎温泉、豊岡市民の場合は 340 円で入れるのです。夜 10 時半までに行けば入れるので、大学の授業とかを終えて一仕事した後に、そのまま城崎温泉に入って家に帰るということが簡単にできるわけですね。しかも駐車場も、市営駐車場を使うと 1 時間無料なので、それは非常に私にとっては幸せな場所となっています。

もう一つは、やっぱり食材が非常に豊かなこと但馬の魅力だと思います。昨日は実家近くのコープデイズに行ったのですが、サーモンとマグロとたたきぐらいしかありませんでした。ところが、同じコープデイズですが、豊岡市のコープデイズに行くと、すごいのです。スズキ、

タイ、マトウダイ。それに、タルイカっていうのですが、一番大きいときで1メートルぐらいのイカが普通に売られているのです。すごいんですよね。ノドグロとか、もう、ありとあらゆる食材が並んでいて、魚介好きの人が一回、但馬地域に住んでしまうと、もう二度と他の地域には行けなくなってしまいます。実際、私はもう但馬に心をつかまれています。それで、毎日のように捌くわけです。自分で捌ける人にとっては、いろんなものが安いのです。これも500~600円で、立派なアジで、さばいているうちに姿造りまで作れるようになりまして、もう毎週おいしいものばかり食べているわけですね。他にも、これ、トビウオです。トビウオもそんなにおいしいものだと思ってなかったのですけれども、これはオープンで焼いているわけですね。地元の農家さんにもらったシソ、あれとシソの実とかでジェノベーゼ風のペーストを作ってオープンで焼いて、地元のミニトマトを焼いて。カニも手軽に手に入るので、カニっていったらボイルしか食わないものだと思っていたのですが、安いのですね。1杯470円。実入りが悪いので、もうカニスバゲティにしたりカニグラタンにしたりしても全然心が痛まないというぐらい、もうとにかく幸せな場所なんです。ここもあれですね、これ、ドギとかゲンゲという魚で、ほとんどこっち側に出回らないと思いますが、これをフライにして食べたり、もう、とにかく、美味しいものがいっぱいある。このイワシも10匹ぐらい入って150円とか。ぜひ皆さん移住するべきです。

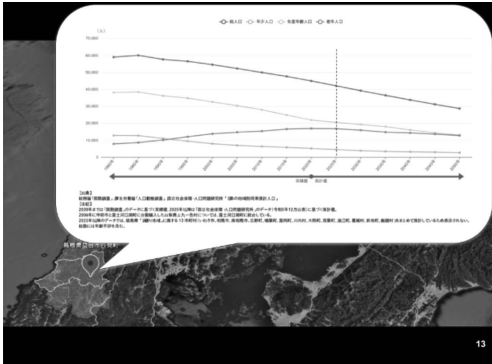
そんな感じで、この但馬地域っていうのは本当にあらゆる食材の宝庫で、行って、そこでおいしいものを食べていると、もう他の地域に行けなくなります。実際、調査などで他の地域行くのですが、やっぱり但馬の食材は美味しいのです。

ところが、そんなに豊かな資源が豊富にある但馬地域においても、やっぱり過疎はかなり深刻化していて、もう、見ている間に、どんどん、お店も閉まっていくし、もうかなり厳しい状況に陥ってきているわけです。

これは人口推計のデータなのですが、人口が減っているのは明らかです。一時期、日本の壊死とかっていうことで地方からどんどん縮小していくっていう話もありましたが、本当に山陰は人の減り方が尋常ではないです。学校の統廃合が進んでいくという話も頻繁に聞く話題です。今日、話題に上がっていた香美町の場合、今は山側のほうに村岡高校があって、海側のほうに香住高校があります。そもそも地域が、もう全然、地域性が違う所に二つの高校があるということが非常に重要だと思っているのですが、これも二つの高校がいつまで維持されるかっていうような問題があったりします。

そういった状況の中で、一体、どうすれば、我々は、こうした地域について考えられるのかというのが一つの大きな課題です。そこで、今日は兵庫県の話がメインであるのですが、これまでに私が、ずっと調査をしていた島根県益田市の、さらに山奥の匹見、という地域でデジタル・アーカイブの構築を進めてきたので、まずは、その話をしたいと思います。

そもそも、過疎っていう言葉がありますが、実は、この匹見という場所が過疎という言葉が公式に初めて使った場所になります。過疎発祥の地っていうことで、当時、ここの町長だった大谷町長と田中角栄さんの仲がよかったということで、国会の場で過疎という言葉を使ったと言われ



図① 益田市の人口推移と推計



写真⑧ 崩壊する空き家

ています。

この地域は昭和 38 年豪雪、いわゆる三八豪雪のときに完全に雪で集落が孤立してしまって、それがきっかけとなって挙家離村、家族全員で広島の方へ出て行ってしまい、急激に人口が減少していきました。

人口を見ていると、1980 年のときには、益田市全体で 6 万人ぐらいだったのが、2050 年には 3 万人、つまり、半分以下になるという推計データも出ています。ただ、これ益田市全体なので、私が調査している匹見の集落のほうになると、多分、もっと深刻な状態になると考えられます。今現在でも 800 人ぐらいの地域なので、2050 年になったら、どうなっているかは全く想像できません (図①)。

過疎地域におけるもう一つの課題は、地元の商店がどうなっていくかですね。実をいうと、私がここでずっとお世話になっている商店の店主さんが一昨年にお亡くなりになったのです。今はその方の奥さんが何とか切り盛りをしていて、移動販売もやっています。しかし、この奥さんも結構、年齢が高くて、この人がいなくなったら、この地域の商店なくなるのです。商店がなくなったり、お店がやっていけなくなると、もう住めなくなってくるので、そうすると当然、どんどん人が流出していきます。だから、そのグラフで見ると半分になるとは言っているのですが、でも実際には、そこでの経済活動は止まっていくので、もっと早いスピードで中山間地域では人口がどんどん消えていくと予想できます。

私は、かれこれもう 10 年以上、この匹見で継続的に調査をしていて、定点観測みたいな形で今見ているところです。そうすると、最初に行ったときには、まだ家の家として建って空き家が、雪の重みとかで、もう何年か経っていくとつぶれてしまっているのです。そういった光景が、山間部の集落に行くといっぱいあります (写真⑧)。

そうした中で一つのヒントとなったのが、この「むらおさめ」という言葉です。これは私が造った言葉ではなくて、鳥根県立大学の作野先生が 2006 年の論文 (作野弘和「中山間地域における地域問題と集落の対応」『経済地理学年報』52、2006) で紹介した考え方です。

「村おこし」という言葉は、皆さんの聞いたことがあると思いますが、「村おこし」は集落の再

生が可能なきに試みるものです。でも、ある一定条件を超えてしまうと、もう集落の再生可能性がなくなってしまう。そのような状況においては、一生懸命頑張るのではなくて、潔い撤退を認めて良いのではないかと、という考え方です。そして、「むらおさめ」の方向に舵を切る権利はその地域の住民が持っているのではないかと、ということです。ただ、そのまま終わらずだけでは駄目なので、やはり、その集落の記録をアーカイブとしてことが重要なのではないかとというのが作野先生の考え方になります。

ただ、作野先生がそのようにおっしゃっていて、それが重要であること、その考え方に共感もしたのですが、じゃあ、誰がアーカイブを作るのか？というところ、まだ当時の議論にはなかったのです。ということで、作野先生の話に私も乗っからせていただいて、科研費も頂いて、それで実際に始めたのが、「むらおさめアーカイブシステム」の開発だったのですね。

一番最初に私考えたのは、これです。おおよそ、2015年ぐらいから本格的に開始したのですが、けれども、当時は国宝級のものを最高級のデジタル技術で残すっていうのがデジタル・アーカイブの一種のメインストリームだったのです。でも、そんなものを持って限界集落でデジタル・アーカイブをしていたら費用対効果は低いし、一般の人には手が出せないわけです。ですから、どこまでコストを下げられるかっていうことと、コストと、その目標品質っていうのをどこで設定するかっていうことを結構、かなり真剣に考えるようになりました。具体的には、どこで無駄な費用が発生するのか。例えば、アーカイブの対象の資料を大学に持ち帰るとなってくると輸送費もかかりますし、資料によっては保険をかける必要があったり、紛失したらどうするか、などなど、いろんな問題が発生します。そこで、現地ですべて終わらせようと思おうと考えることになったんです。

特に、現在の大学教員の働き方にも色々と課題があって、調査から帰ってきた後に、データベースに入力するとか、後の作業が全然できないのが現状です。そのため、どうせなら現地で全部を完了させるという仕組みにせねばならない、という思想の下で開発したのが私の「むらおさめアーカイブ」のシステムです。

これはライティングのセットなのですが、工夫の一つとして、プロ用のものではなくて、ホビー用のクリップライトに全部してありますし、支柱は金属じゃなくて紙製のものを使っています。サランラップの芯みたいなものです。これを繋ぐためのジョイントとかも売っている所があって、全部紙で作っています。畳とかを傷つけることもなく、倒れても紙なので安全というメリットもありますし、支柱が1本80円でコストパフォーマンスも良いのです。年度末の最後に消耗品で買いやすかったり、捨てる時にも捨てるやすいし、備品登録も要らないので非常に手軽で扱いやすいものなんです（写真⑨）。

もう一つの工夫はカメラの選定です。いわゆる一眼レフカメラは重いのです。そうすると、そのカメラのために三脚も重くなります。全部、機材が重くなっていくので、もうミラーレス以上にはしないっていうのが一つのポリシーで、グレードの高いカメラを使わないことで、機材を軽量化することにも成功しました。



写真⑨ デジタル・アーカイブの機材①



写真⑩ デジタル・アーカイブの機材②

結果的に、私の使っている機材セットっていうのは、1人で全部の機材を折り畳んで、1回、1往復で物運ぶことのできるセットになっています。大がかりなデジタルアーカイブプロジェクトだと、まず、カメラを固定する支柱だけで何十キロにもなって、さらに、プロ用の三脚とかを使うと、すべての機材を運ぶには2~3人の補助要員が必要になってきてしまいます。これがさっきのセットで撮った写真です。フィルムとかも結構、よく出てくるのですが、このときにはiPadで白い光を出して、それで上から同じカメラで撮っています(写真⑩)。

実を言うと、この撮影作業とかも全部、コンピューターのパソコンのほうにつないでいて、シャッター押してデータベースに入れて、さらにメモを入れるっていうのも、全部、このマシンの一人できるように設定しています。実際の作業では、資料を仕分けしたり、メモを取る必要もあるのですが、それでも一人で1日に150枚から、多いときで1日300枚ぐらいの写真デジタル化できるシステムになっています。

これもネガから起こしているのですが、でも、これぐらいの画面でやっても、そんなには破綻していないことが確認できると思います(写真⑩)。

このシステムは一応、国際標準(地理情報標準)に準拠したシステムになっていて、データのインポートやGISの形式としてアウトプットにも対応しています。

これが、実際の作業ですね。ここにメモとかも全部入っていて、ここで撮影するっていうボタンを押すと接続されているカメラでシャッターを切って、自動的にこのデータベースに写真情報が一緒に入ります。撮った画像については、例えばネガフィルムだと反転しているのでポジに変換したり、上から撮影してはみ出た部分を自動的にクロップしてくれたり、あとはAIを使った人工着色する機能とかも全部入っています。つまり、これ一つですべて完結するようなシステムとして開発しました。

ところで、このシステムを使ってアーカイブ作業を続けていくと、ちょっと面白いことが分かったのです。温故知新という言葉がありますが、「温」って何なんやろうと思っていたら、この冷えて固まったものを、もう一度、温めなおすという意味だそうです。例えば、アーカイブ作業が終わった後には、その地域の人からお借りした資料を持ち主に当然返しに行かないといけな



写真⑪ ネガから再現された写真



写真⑫ オーラルヒストリーの記録

いですよね。実は、このアーカイブシステムはデジタル化した写真を表示しながら録音できるのです。この写真を見ながら、今、ここで話をしているんですけど、この内容を今、録音ボタンを押しているので、話ししている内容が全部、ここで入ってきます。この機能があるので、デジタル化した画像を持ち主の方と一緒に見ながら話しを聞けば、それがそのままオーラルヒストリーとして記録されるのです（写真⑫）。

最初、このおじいちゃんも「そんなアルバムなんて」とかって言っていたのですが「デジタルになって持ってきました」って言ったら突然しゃべり始めるのです。しゃべり始めて「ああ、これ、この写真あった、あった」みたいな。聞いてないこととかもいっぱい教えてくれたり、誰々さんと誰々さんがこのとき喧嘩してな…みたいな話とか、いろいろ出てくるのです。

そうこうしているうちに、昔のことを思い出しながら、なんかちょっとやる気が出て来ることが結構あるってということが分かったのです。だから温故知新とはいうけれども、これアーカイブを使うという視点ではなくて、アーカイブのプロセスが地域住民の人にとっての温故知新になるのだからってのをちょっと感じというのが、自分の中での新しい発見でした。

あともう一つは、前任校の学科がほぼ男子校だったので、男ばかり最大で15人連れて、ずっと調査に行っていたことがありました。一番ひどかったときは、宿泊している集会所が、もう本当に臭いのですよね。獣臭がすごいのですが、お風呂も何もないのです。お風呂も何もない所に行って、それぞれみんな課題があって調査をするのですが、行っている間、丸一日調査をするのではなくて、半日は、この集落のために汗を流して働きながら、そこで聞き取り調査をして、夜に酒飲みながら、その日の発表を行うみたいな、そういう形式です。

半分は遊んでいるのですよ。この写真では、学生たちは、実は川で洗濯していて、最初は嫌がっていたのですが、ちゃんと天日干したら川の水で洗っても臭いが付かないということに気付くのです。そうすると、洗剤って、実はなくてもいいのだとかっていうふうな、この地域の中の活動の中から学生たちが学んでいくのです（写真⑬）。

この頃には、もうかなり洗練されてきていたので、学生たちに、もうGPSの位置情報だけ渡して「ここに行け。公共交通機関しか使ってはいけない」と言って行かすのです。最後、5キロ



写真⑬ 洗濯しながら遊ぶ学生たち



写真⑭ 手造りの物干し台

歩かないといけないのですが、地域の人にも慣れてくると、学生たちとコミュニケーションをとることが一つの楽しみになっていって、「先生にばれないように」途中まで送ってくれるようになっていくんです。

彼らは到着したら、この集落の前の竹を伐採して洗濯の干し竿を作るのです。よく見ると、これ、紐とかの人工物は使ってなくて、つるなどで学生たち自身が工夫して作っているのです。しかも、ここの後ろの網戸、この網戸もない所なのです、夏場。もう大変なことになるので、彼ら自身で網買ってきて、この木枠を地元のおじいちゃんにもらってきて、網戸を作るとか（写真⑭）。このように、調査の過程、アーカイブを残す過程に、そういう学生たちを連れていくと、地域の人に教えてもらって、いろんなスキルを身に付けていくのです。さらにそれが楽しくなって、やっていくうちに、今度は、おじいちゃん、おばあちゃんたちも楽しくなって一緒に参加してくれるようになっていくのです。

それが一つ、すごくうまくいった例です。ここは、わさび田です。高齢化が進んでいって、もうだんだん使わなくなっていって、上のほうはしんどいから、放棄された場所があったのですが、学生たちのスキルが高過ぎて、水路掃除とか一般的なやつが、もう全部あらかたできちゃうようになっちゃったのです。そこで、使うかは分からないけれど、ちょっと学生と一緒に、使えるように一回綺麗にしてみよかという話になりました（写真⑮）。

去年、私がこの場所に行ってみると、このような状態になっていました。きれいに整備されています。あのとき、学生と一緒に、ここを綺麗にした後、地元の人たちは若い移住者の人に貸したり、養護学校に一面貸して、そこで就労支援みたいな形で使っているといいます。使わなくなって減びていくはずだったものを、違う形で使うようになってくれました（写真⑯）。これもわれわれの活動の中で、しかもアーカイブっていうのが最初の目的だったのですが、それに付随する活動の中で「昔のわさび田はこうやった、ああやった」とか、「もう自分たちではできへんけど、やっぱり作ってもらおうか」のような形になっていったのです。今から振り返ると、アーカイブ活動にプラスして新しい価値が作られていったのではないかと思います。

最近はまだ一歩進んで、そのアーカイブそのものをどう利用するかっていうことも今考え始め



写真⑮ ワサビ田の清掃作業（2018年）



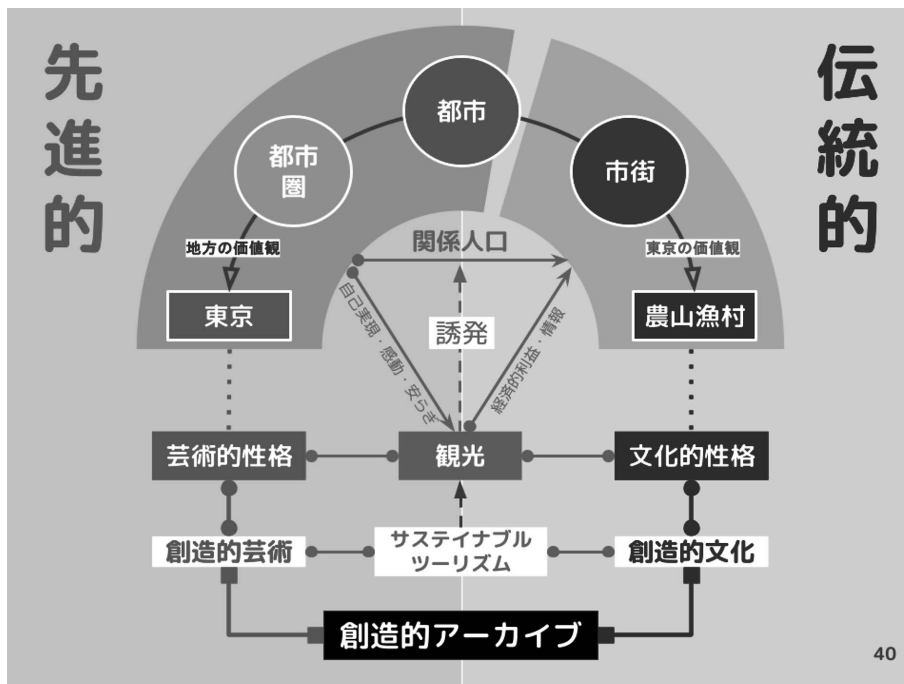
写真⑯ 現在のワサビ田（2023年）

ているところです。これは私が今考えていることの一つなのですが、芸術文化観光専門職大学という大学は芸術と文化と観光の大学なので、そうした視点を加えようと考えています。そもそも、江戸から東京っていうときに西洋文化を大量に持ち込んできて、一種、アートの力によって江戸から東京へというような文化的な活動だったのですね。その名残では、私の説としては、その東京のカリスマ性というのは、芸術的な性格というところがあって、それに対して地方ってというのは文化的な性格、要するに、アートとカルチャーというふうなもの、この二つがそれぞれ都市から、この地方へというふうなものになるのではないかとというふうなことを考えています（図③）。

ということで、ただ単に作るだけではない、残すだけではなくて、その両者を結び付けるような「創造的アーカイブ」を作れないか、ということで、さまざまな試みを始めているところです。実際に、まだうまくいっているわけでも何でもないのでありますが、現在進めている内容についても最後に紹介したいと思います（図③）。

今までは、アーカイブするのは歴史的に重要だから残しましょう、という考え方が中心で、その先というと、やはり難しかったというのがあります。何が難しいかというと、歴史とか文化とか、自然系でも岩石とか、好きな人、興味のある人は好きだけれど、興味ない人にとっては全然面白くないというのが現実です。それが、例えば、金閣寺や東大寺の大仏であれば、みんな何となく納得してくれるのですが、でも地方の文化財というのは、知っている人が見たら面白いけれど、知らない人から見ると、よく分からないというのが実情です。これをいかにして、地域資源としてアーカイブ化し、それをもう一度、作品化して観光のほうに結び付けていくか、というサイクルをつくることができれば、うちの大学の名前に恥じないようなことができるのではないかとということを常々考えています。

では、具体的にどのようなことができるか、ということで、いくつかの事例についても紹介したいと思います。現在、注目しているのは、過去に自治体が発行した報告書とか、市町村誌であるとか、そうした地域に関する情報を生成 AI に読み込ませて、新しい物語を作って、さらにそれを音声情報と位置情報を合わせて、現地歩きながら、地域を体験しながら聞けるようなス



図③ アートとカルチャーと観光の関係性

40

トリーを作ろうっていうことを今やっているところです。取りあえず、生成 AI の活用例を紹介したいと思います。

+++++  
 動画

俺は、藤本准教授のスマホなんだけど、今日は、豊岡稽古堂で、市民講座があるってことで、朝から、振り回されっぱなし。

稽古堂って、昔の市役所を、改修して作られた、市民交流施設で、レトロな外観が、特徴的な建物なんだよね。

でも、准教授、パニック状態で何も見えてない。

格好つけて、正面の自動ドアに向かったのに、ドアが開かなくて大騒ぎ。

「入口くらい、調べといてよ！」

通りかかった、人に教えてもらって、なんとか入口を発見。

だけど、今度は入口の前で、「押しても、引いても、開かない！」と、また大騒ぎ。

「貼り紙に、『手動で開けてください』って、書いてあるだろ！」

稽古堂の中は、落ち着いた雰囲気、素敵なんだけど、准教授、自分のことで一杯。

なんとか、エレベーターに乗った准教授、今度は2階で降りちゃう。3階が目的地なのに…。

「アッ！」って、気づいたときには、エレベーターが動き出して、さらに、パニック。

慌てて、階段をダッシュで登るけど、案の定、最後の段で、派手に転んだ。

「言わんこっちゃない！」でも、懲りずに、走るのは、ちょっとすごい。  
 ようやく、会場に着いたところで、格好付けているけど、  
 ほら、また転んで、かばんの中身をおちまけて、資料や、お菓子が、床に散乱。俺も、一緒に吹っ飛んだ…。

「もう勘弁してくれよ…」

最後は、発表者席。准教授、深呼吸しながら、「俺ならできる」とか、言ってる。

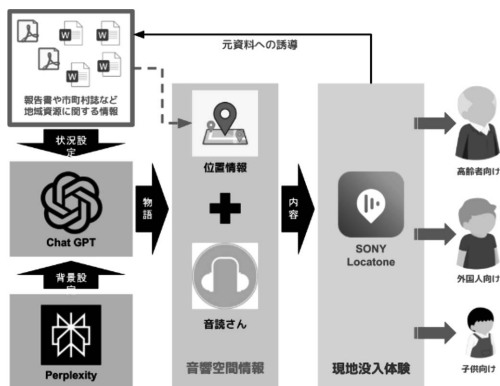
稽古堂の頑丈な建物が、支えてくれてること、忘れないでよね。

こうして俺は、静かに、時計を表示しながら、その時を、待った。

+++++

この動画は完全に AI で作り込んでいます。今回の場合は、本当に一般の人たち向けなのでギャグテイストで作ってあるのですが、塩梅はあって、地域情報のほうの情報量を増やして、そっち側をメインにするようなストーリーにもできますし、今のように、そのストーリーの中で、その文化財のことを紹介するようなストーリーも作れます。さまざまなやり方はありますが、今までは、その興味のない人たちにどういうふうを持っていくかっていう課題があった中で、今のようにストーリー化するっていうことが一つ重要なことではないかと考えています（図④）。聴いていただいた例では、一つの建物だけだったので面白くないのですが、今現在、もう一つやっているのが香美町の柴山地域での試みです。

柴山ガニというブランドのズワイガニで有名な地域ですが、何も言われずに柴山駅で降りても、多分、普通の人は何も分からないと思います。どのように歩いていったら良いのか、どこに向かっていったら良いのか、何を見て良いのか、おそらく、ほとんどの人が分からないと思います。そうしたどこにでもある、田舎の漁村で、今、ソニーさんのシステムを使って長い音声ストーリーを作っています。このシステムでは、一つの大きなストーリーが分割されていて、それぞれのシーンが特定の場所に入った瞬間に、そのシーンが再生されるようになっています。そうすると、Audible とか、FM ラジオでラジオドラマってありますよね。このシステムを使うと、ラジオドラマのシーンを主人公たちと一緒に歩きながら地域を探索できるような、作品を作るこ



図④ 生成 AI による地域情報の物語構築



図⑤ Locatone によるコンテンツ作成

とができるので、これをうまく展開していくことで、さまざまな地域で、そういうふうな文化財の情報から、それを別のストーリーに作り替えていくことができます（図⑤）。

既にストーリーがあるものを使うという方法もありますが、私が調査している地域は、地元の人に聞いても、少しの情報しか無かったり、何も知らないって言われてしまう地域です。実際には、色々な物があって、例えば、「これ、力石っていう石で、昔、この石を1人で持ち上げられるようになったら一人前になるっていう話や」という一行の説明で終わってしまうものは結構あるのです。そういう個別の小さな話をどうやってストーリーにつなげていくかという際に、AIをうまく活用していくことで、ストーリーに乗せられるのではないかと考えています。

しかも AI による作品作りは効率が高くて、一つの地域の場合、おおよそ数時間のストーリーをつくるのに、大体、1日半ぐらいでできます。1地域、1日から2日ぐらいで、AIストーリーが作れてしまいます。但馬全域で一つのストーリー作れてしまいます。あと、AIをうまく使うとストーリーの更新しやすいのです。よくある話として、1回目のコンテンツ作りはかなり力を入れたけども、2回目作るパワーがなくて、気が付いたら5年前、10年前のコンテンツが残っちゃ放し…ということがあります。

これも挑戦をし始めているのですが、1年ずつ年取っていくようなストーリーはできないかな？と考えています。そんなことも、ひょっとしたらできるかもしれないと思っています。どこまでできるかは、ちょっと何とも言えないのですが…。

このように、いよいよこのアーカイブというのも、この10年必要だっという認識は皆さんされるようになってきたと思いますが、では、そのアーカイブをどうやって使うのか？そもそも、アーカイブっていうのは利用目的を考えなくても良いのですが、とはいえ、やっぱり活用しないといけないというプレッシャーは各方面から来ています。もう一つの観点としては、文化とか芸術というのも、これまでは補助金出してでも、とは言われていたのですが、でも経済状況が悪くなっていく中で、それにいかにして価値付けをしていくのか。さらに、そこから新しい価値を創造して、でもただ単に、マネタイズっていう意味ではなくて、地域にも還元できるような何らかの本サイクルを生み出していくっていうところをちょっと考えていかないといけないのかなと思います。

そういう意味で、最後の締め言葉としては、「温故知新」という言葉があったのですが、「温地創新」ということで、地域のさまざまな資源を掘起こして、さらにそこから新しいものをつくり出していくというふうなことをこれからも考えていきたいなっていうふうに思います。若干過ぎてしまいましたが、以上で発表を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

+++++  
大江 ありがとうございました。AI を使ったの最先端のご研究で、アーカイブ、とすれば民俗学とか歴史学の人たちは、どういうものをきちんと残していくのかというところまでなのですが、その、今回は地域での活用というところまで広くお話をいただきました。

それでは、三つお話が終わりましたので、ここで休憩を取らせていただきたいと思います。冒頭に申し上げました、小さなメモ用紙入れております。ぜひ皆さんがたの地域で、今、こんなところで悩んでいるのだけれどもっていうふうなことを、お二人の先生がたにもお話を聞かせていただければなというふうに思います。

+++++

## 【討論】

大江 ディスカッションを始めてまいりたいと思います。おひとかた、質問紙をいただいています。

藤本先生にということですが、二つございまして、一つは、先ほど事例で、最後にアーカイブの情報から AI でストーリーを作ったというふうな、香美町で現在実施されている取り組みの話があったのですが、力石のお話が出てまいりました。今、確かに力石は尼崎市内にもありまして、それ持ち上げたらうんぬんって話まではあるのですが、それは具体的に AI がストーリーをつくと、どのようなストーリーができたのかなというのがあれば、お教えいただきたいというのが1点目でございます。お願いします。

藤本 そのストーリーを作るときに、二つの情報が必要なのですね。一つは、その文化財に関する情報で、これは報告書とかに書いてあるほうの情報で、それからもう片一方のほうは、ケース・バイ・ケースにはなるのですが、それこそドラマ仕立てのストーリーというのと、ここにドッキングさせるような形でしているのです。力石に関する情報が少なければ、それだけ力石の情報は勝手に AI が膨らませてくれるわけではないです。あんまりそこを他の地域の話とかを混ぜてしまうと、多分、全然違う話になってしまったりとか間違った情報になってしまうので、その文化財を扱う、文化財の話を AI でやるときに、どこまでをフィクションに寄せていいかどうかというところは、ちょっと調整しないといけないところかなと思います。

大江 ありがとうございます。もう一つ、AI のお話なのですが、ChatGPT に、具体的にどんなふうに命令を出すと、うまくそういう場合にいくのだろうかというふうなところです。

藤本 これは将来的に商売になるので、あんまりレシピを教えるのはできませんが…ざっくりというと、一番初めに、ChatGPT とはまた別に Perplexity っていう検索 AI があって、この検索 AI でキャラクターの情報を先に作ります。

例えば定年退職後の夫婦が家庭でどんな問題を抱えていますかといって一般論をつくらせて、じゃあそういうふうなケースで、4人家族で、奥さん、旦那さんで、既に家を出た2人の息子と娘がいるような典型例の家庭のプロ



ットを書いてくださいみたいなもので、先に、プロットを作らせて、人物データを先に作らすのですね。その人物プロフィールをいったん作らせて、登場人物を先に用意しておいて、今度は、例えば香美町のこの場所を舞台に、こういうふうな夫婦の会話が展開していくようにシーンを考えてくれって作らせて、あとはそのシーンを分割させながら、ここの場所で、この説明をしてくれっていうふうに配置させていくと物語が作れるのですが、結構細かいところの工夫が必要で、その工夫のところ、ちょっとまだ企業秘密というか、実をいうと企業秘密というよりは、自動化がまだできてない部分なのです。

ここのところは自動化できたら商品になるかなと思っているところが結構あって、ちょっとそういうことを考えながら、どこまで自動化できるかっていうところが勝負かなというところですね。でも大きな流れでいうと、人物作る、ストーリーを作る、それをその地域に当てはめてシーン展開するっていうふうなのが基本的な流れになるのです。

私の場合は、そのソニーさんのシステム使っていますけども、極端な話、Google マップでもできる話なので、やろうと思えば Google マップで地域紹介ストーリーみたいなものを展開するとか、ひょっとすると大学の授業とかで学生さんとか、あるいは高校の生徒さんと一緒に書いてというアクティビティーやるのがいいのかなと思います。以上です。

大江 ありがとうございます。他に質問はあるでしょうか。

A 兵庫県地域振興課の A と申します。よろしくお願ひします。歴史文化の保存とか活用の今後の展開という中で、何かとかけ合わせをしていったりされているかと思うのですが、新たに何かコラボレーションしてみたいなというような分野とか内容とかで、何か頭にあったらお教えください。

藤本 そうですね。あり過ぎるので、どこから手を付ければっていうふうな話になるのですが、一つは、今、AI のこととか、あともう一つは、その出石の永楽館を市民と一緒に、iPhone で今、3次元モデル作れるのですね、簡単に。そういうふうな活動とかをした後、これどうするかっていうのがあって、今、その永楽館のほうで兵庫県のデジタル推進室と一緒に企画を進めさせていただいていますが、永楽館っていう建物を、芝居小屋を、みんなと一緒に3次元化した後にメタバースにしてバーチャル寄席をやる。バーチャル寄席をやって、優勝者とか入賞者を招待して、今度、現地でやるみたいな形で、ただ単にバーチャルで終わらずだけではなくて、バーチャルなものをきっかけに人を集めて、それを実際の現地に誘導する、この仕掛けをどうやってつくるのかっていうところは、今、ちょっとやりたいところで。

それは別に医療とか、例えば健康をうまく促すような仕掛けをつくって、そのおいしいものを食べて皆さん健康になりましょうとか、そういうふうな形で呼んできて、そこで今度、文化財であるとか、地形、地質、ジオパークに関する学びとかっていうのをうまくそのストーリーの中に、健康ストーリーの中にそういうのを乗せていくとか、そういうふうな形もありなのかなと思っています。可能な限り、特定の分野というか、いろんな分野と、その文化財であるとか地域資源を結び付けていくっていうところを、ストーリーとかアートとかみみたいな形で結び付けることが

できるような仕掛けが欲しいです。

大江 ありがとうございます。他、いかがでしょうか。

**B** 兵庫県無形民俗文化財ヘリテージマネージャー会の事務局長をしております。

一つだけ質問があって、これ、すごく軸だったのですけれども、「村おさめ」というものがありました。「村おさめ」したときに、結局、そしたら他の所に移住するのだけど、ちょっと自分のことで置き換えて考えてみると、「村おさめ」した後で、やっぱり近くに一緒に住んどった人たちともう一回、できれば一緒に住みたいなっていうふうに分かたかったら思うだろうなというふうに思いました。実際に、その「村おさめ」した人たちっていうのは、そういう思いを持っているのかどうか。じゃあ持っていたとしたら、それがかなえられているのかどうかっていうの、もしご存じでしたら、ちょっとお教えいただきたいと思うのですが。

井上 ダム建設に伴う移転の事例については、細かい件数はまだ確認できていません。ただ、町内に移転された方はある程度まとまって移転されているようです。ですから、そこでは集落の連続性は何らかの形で残っていると思います。とはいえ、この先世代交代が進むにつれてその連続性がどうなっていくか、どう考えていくかは一つの課題だと思います。

藤本 ちょっと複雑な問題があって、ダム移転の場合だと、それぞれ集団で移住という形になりますが、私が対象にしていた匹見地域には、豪雪がトリガーにはなっていないものの、その一歩手前に、色々な事件もあったようで、そこに住みたくないという気持ちで出ていったという面もあったのではないかと思います。

とある集落のアーカイブやっていたときに、偶然、その、私の活動が新聞か何かに出て、ある方から連絡をいただいたことが一度だけあったのですけれども、その方は今になって思うと、もう古い先ないからってということで、これだけは話しておきたいってということで私に電話をくださって、当時の資料とかをちょっとだけ送ってくださったことがありました。ですが、その方の場合は、もうちょっと若いときには恨みしかなかったって話があって、だから集落がどんどん過疎で衰退していく過程の中で、思い入れがあって出ていく人もいれば、そういう思いよりも、むしろ恨みを持って出ていくっていうケースがあるので、そういう場合、どういうふうにするのかっていうこととか、あとはアーカイブの取り扱いの仕方っていうのも、そこにはちょっと注意が要るかなっていうのを。

大江 ありがとうございます。香美町の小代の二つ紹介をした熱田と小長迫でいうと、熱田は集団移転による「村じまい」です。一方、小長迫はばらばらに二つぐらいの集落の中に皆さん入られてしまいコミュニティーが分断されました。その中で、よそから入ってきた者たちが、もともとの村の人にどう受け入れられたのか。移転から20年、30年たった今でも複雑な思いを語られます。その話は、オフィシャルなアーカイブ、行政の民俗報告書には書けない部分なのですよ。でも、その思いは大事だと思います。現代でも村を維持するために、移住者の方をどう受け入れていけばいいのか、地域おこし協力隊でも村の受入れに課題があると聞いています。地域づくりに大きく関わってくるところですよ。

ただ、そのような記録が全く残らないままではいけない。どう残していくのか。表に出ない形であっても、きちんと記録化していくことは大事だと考えます。それも、ケース・バイ・ケースだとは思いますが、もともとあった集落がどういうコミュニティになっていて、それがそういう自然の状況のなかで、移らざるを得ないような状況であるのかというところが大切です。

それから本当に兵庫県下では、ダム建設で水没した集落の民俗報告書を作っています。『青野川・黒川水系民俗調査報告書（兵庫県民俗調査報告 8）』（兵庫県教育委員会、1979）、『国崎 一庫ダム水没地区民俗資料緊急調査報告書』（川西市教育委員会、1975）などです。しかし、集落が移った後がどのようになったかという記録を残していないのですね。移転するから、水没するので、その集落の記録を残しましょうというところで止まっています。そういう意味では、生活の記録を経年的にアーカイブ化していくということが大事なのかと思います。

そういう取り組みが民俗学で全くないわけではありません。昭和 10 年代に柳田國男が全国百か所に『郷土生活研究採集手帖』を持たせて弟子を派遣したノートをもとに柳田國男編『山村生活の研究』（民間伝承の会、1938）、柳田國男編『海村生活の研究』（日本民俗学会、1949）、日本民俗学会編『離島生活の研究』（集英社、1966）という本にまとめています。その採集手帖（フィールドノート）が成城大学民俗学研究所に保存されているのですが、調査から 50 年後を追調査した『昭和期山村の民俗変化』（名著出版、1990）という本が刊行されています。30 年後、40 年後にどう変化していったのかということを記録していくことが大事な作業だと思うのです。けれども、藤本先生のお話を聞いていて、われわれがやってきていた調査は時間とマンパワーをかけて、長年かけて聞き取りした音声文字起こしという形ですので、なかなかそれができる余力がもう村にはありません。研究者も時間がとれないというなかで、オーラルなアーカイブの在り方が大きな課題なのだと考えます。

それでは、井上先生から藤本先生、藤本先生から井上先生へとそれぞれのお話聞いていただいたコメント、ご質問をお願いします。

**藤本** 私、結構、海側を調査することが多くて、その一方で生野のほうとかは、直接は今回の話には関わらないかもしれないんですけど、銀の馬車道と鉱石の道という二つの道の話があって、これをどう仕立てていくのかなっていうのは一つの課題なのかなと。もっと言うと、ジオパークにくっつけて、瀬戸内と、この日本海をストーリーとしてつなげるということをやらないと、兵庫五国と言っている場合ではないと思うこともあります。

その中で多分、一番、肝心なのが、今回お話しいただいた生野から朝来の、あの辺りっていうのを、どうやって北のほうと南のほうをストーリーとして接続できるとするならば、どういうところにポイントがあるのかなっていうのを、もしもヒントになるようなことがあれば、お聞きしたいなと。

私も但馬に行っていると、ストーリーが全部、点なのです。なので、出石そば食べに行くとか、城崎温泉に入るとか、どこに行くっていう目的と、その行動が、もう一つになっていて、高

速道路で突っ切っちゃうみたい。便利なので良いのですが、でも途中で下りたり、但馬に行くまでの道も楽しめるようなストーリーって作れないものか、ちょっと考えているところです。

井上 生野というのは南とも北とも繋がっているんです。資料を見れば、人や物や情報が交流しているのは見えてくる。だから繋がってはいるのは確かなんですが、それを観光に繋げるというとまだちょっと…。私が観光方面に意識を向けていないというのもあると思うんですが。ただ、今は日本遺産で「銀の馬車道」「鉱石の道」が知られていますけれど、ほかにも西国三十三所の巡礼道とか山陰道とか、ひとつの道の上に色んな道の要素が含まれているんですね。ですから「銀の馬車道」「鉱石の道」にこだわらないで、ほかの道が持つ要素を取り入れるというのもひとつのアイデアかなと思います。

大江 ありがとうございます。本当に人と物の流れについて、日本遺産でもストーリーでつないでいって、文化財行政そのものが点から面へということになっているのですが、そこに現代のモビリティの社会の中ではない、歩いて回っていたときの人の流れをきちんと歴史を押さえていきながら見ていくと、まだいろんなものが発掘できるものがあると思います。

今日は、丹波篠山市からもお見えですけども、丹波篠山市福住の宿場町に祭礼（水無月祭）があって、鉾山（屋台）の上で打ち込みばやしというお囃子があります。そのお囃子は、明治時代に遠山宗九郎という福住の大庄屋が、能勢を超えて大阪の文楽座に習いに行って作曲したものです。このルートは現在使われることも少なく、文化的に大阪と篠山の福住がつながっていくということはほとんどないでしょう。また、遠山宗九郎は京都府の園部市や京丹波市の祭礼のお囃子も書いていたことが日記に記されています。

豊岡市出石の芝居小屋「永楽館」にも人の動きがわかる史料があります。太夫座の壁に多くのお芝居の、それは京都の座もあれば、播州歌舞伎、淡路の人形浄瑠璃も来ていたことがわかります。その記載から、かつての人の流れ、動きがわかります。でもまだ調査、発掘できていない部分があります。そういう断片的な史料をつないでいくことも大事だろうというような気はいたします。

だからストーリーの種になるようなものが歴史資料や民俗資料の中にもまだ眠っているし、意識していない人や物とのつながりが見えてくれば、出てくるのかなと感じるところですね。

井上 ストーリーというところで、藤本先生に質問したいのですが。日本遺産などではよくストーリーという言葉が使われています。わかりやすさを考えたときに、それが人を呼び込むために必要な要素だというのは理解しているのですが、歴史学的にみると史実に即していない、おかしなストーリーがあるのも確かなんですね。なので、ストーリーを作るときに、何を意識して作っておられるのかを教えてくださいたいです。作り手の側のことを知ればこちらの考えも少し変わるのかなというところで、その辺をお伺いしたいです。

藤本 実は、うちの大学のほうでシンポジウムをかつてやったときに同じ話が出てきたのですが、例えば、有名どころでいくと、出石そばはどうやって伝わったかっていう話があって、それは戦国時代のお殿様が出石にやってきたときにそば職人を連れてやってきたなんていう話がある

のですが、これは本当は分からないのです。

これは最近始まった話じゃなくて、実は但馬地域に限らず、うそか本当か分からないけども、観光客を呼ぶために面白いからっていうので先走った話、養父市のやぶ医者とか、そういうもういろんなものが実は既に存在してしまっているわけですね。

そこで落とすところはどこなのかというのがあって、この前、議論をしたときには、それを歴史的にはそういう事実がないというふうな話をして止めてしまうと、それはそれで問題だし、でも、それが実は、その面白い話であって、それが事実ではないというのをきちんと伝えることも重要だね、という話になりました。このバランスをどうしようかっていうふうなところは、これからも検討しないといけないと思います。特に過疎が進んできていて観光客がどんどん低迷しているときに、あの話、実は嘘だった、とは言えないのですよ。どうするのかっていうとこなんですよ。

あとはストーリーも今現在作っているのですが、その文化財の情報をいっぱい詰め込んで、そっち側の説明を増やしていくようなストーリーの作り方もできれば、そもそも、美術館とか博物館の、あの展示パネルを読まない人たち向けのストーリーっていうと、情報量をぐっと下げてシンプルな形にしていくことも重要だったりします。だから、もうほとんど関係ないくらいまで落とさないと聞いてくれない人たちも相当いるので、こここのところをその AI でどういうふうにして強制するかっていうことと、少なくとも、うそは混ぜないようにする工夫する必要があります。既に出回っているものに関しては、そういう説もあるとか、きちんとした事実をストーリーの中に別の形で埋め込むことが必要だと思います。

大江 歴史文化の二次創作の問題というのは当然存在します。例えば、昨年大河ドラマ『光る君へ』で平安時代が舞台だったのですが、ネット上で出るのが、どこまでが史実で、どこまでが創作なのかというふうなところ。また、自治体誌に編さんに関わっていても、民俗文化のところの記載では、これは伝説ですよ。伝説・伝承って、もともと史実ではなくて作られたお話だということになります。研究論文の中で寺院縁起がお寺の営業戦略で物語が作られ、それで靈験譚が生まれて、信仰で入ってきていると論じると、お寺さんに怒られたりもします。当然、事実ではないものっていうのがあって、いつの時代もそういうふうな形のもものが生まれてきている中で、やはりそれを理解した上で、ストーリーをきちんと使っていないと陰謀論になってしまうたり、とんでもない歴史の捏造になってしまいます。捏造かどうかという、そのオーセンシティブ（真正性）の問題というのは、常に端境のところなのかというふうに思います。

そういったいろんなメディアなり、物語、ストーリーというのが、どう変遷してきているのか、その背景に何があってということなども、きちんと理解できるような作り込みが、難しいながら大事な部分ではあるのかなってところですね。

史料を翻刻していて積み上げていくだけでは、歴史自体がそのもともと物語なので、そういうせめぎ合いの中で、いろんなかたがたに分かりやすく伝えていくという部分が大切ですよ。そのさじ加減のところは AI でできていくというふうな形になっていけば、ものすごいことだと

思うところではございます。

本当に今の部分が大事で、活用、活用と言いながら、実際、それで人が来てもらって経済的に地域が潤っていくという部分が一つと、今日の大きなテーマである、逆に消滅、滅失していくところをきちんとどう残していくのかというところで、今、少し活用の部分に話題が移ったのですが、どうでしょう。井上先生は、もう人口がなくなってしまって村を閉じないといけないところの、まだ元気な周りの集落も含めて、少し広域で見えていった中で、ちゃんと地域の歴史を残していこうという部分ですし、藤本先生は、それがツールを使うことによって、研究者でもなくても、いろんな方でもできるのかなという、記録化を進めていく上での重要なツールなのではないかと考えるところです。

いかがでしょうか。お二人とも、村に入られて、活動をなさっていて、これを本日、フロアにもいらっしゃるような、実際に大学にいる研究職に就いている人ではない地域の方も一緒になって、そういうものをパブリックに残していこうというところでの普及していくうえのご苦労であったり、今後の展望であったりについてお教えいただければと思います。

井上先生はいろんな地域で、地域の方と古文書読む会の活動をされていると思うのですが、実際、地域でそういう活動をされているかたがたも高齢化していると思われる。それが若い世代、10代の高校生とかに広がっていくようなところについて何かご意見、今後の展望みたいなのはいかがでしょうか。

井上 私の場合は、色んな地域で古文書の整理をさせてもらっています。各地の事例報告を聞くと、古文書関係のグループというのは、おじいさん、おばあさんがたくさんいて、3年、4年とたっていくうちに1人減り、2人減りということもよくあるようです。ただ、今私が担当している、10年以上続いているところは、なぜか次々新しい人が入ってきています。

自分なりにその理由を考えてみたのですが、整理会を、古文書を読める専門家集団を養成するためではなく、古文書や地域の歴史に触れる人を増やすことを目的にやっていることが長続きの秘訣ではないかと思えます。要は、緩いんです。くずし字を読めなくてもできる作業があるので、読めない人もやってくるし、世間話だけをしに来る人もいます。逆に、ここなら現物の古文書に触れられてたくさん読める、と阪神間から通われている方もあります。そうやって緩く長くやっていると、資料を読みたくてくずし字をマスターする人や、自分なりに調査を始める人が自然と出てこられるんです。そうやって、地元の方が動きはじめれば、結果的に若い世代にも影響を与えていくのではないかと思います。ですから、無理に人を養成しようとするよりは、地元の方と地域の歴史文化を切り離さない環境を維持し続けるというのがポイントというか、私の仕事ではないかなと思います。

藤本 私のほうは匹見のとある地域、ずっと今、定点観測を続けているのですが、そこで思ったのは、まず地域の人とちゃんと話ができるようになるには大体5年かかるっていう感覚があります。まず5年ぐらいかけて、ようやく顔を覚えてもらって、あいさつ返してくれるところが調査スタートだと思っていて、これは過疎が進んでいって、どれだけ時間がかかっていっても、

地域に入ると、やっぱり時間かかるのですよね。

これはちょっとアカデミックに対する批判も含まれるのですが、論文書くとか大学の仕事に追われ過ぎて、同じ地域にじっくり入ってという研究者が減っているように感じています。匹見地域も毎年欠かさず来ている研究者で一番長くなったのは私になったみたいで、それ以前に来ていた先生たちは来なくなってしまったと聞きました。

今、実はちょっと新しい試みというか、進めているのが継続的な人的交流です。前任校は奈良大学で、今は芸術文化観光大学に移ったのですが、この匹見の活動は前任校の奈良大学のときに始めたものです。しかし、専門職大学の学生連れていっているかということ、実は連れていってないのです。その代わり、もう卒業した、その前の前任校の学生たちに、私が調査に入るときに「今回は〇月〇日から〇月〇日まで行くのだけど、同窓会的に来ないか？」という情報を回して、同じ子たちをひたすら呼び続けています。新しい人が入っていくのも重要な一方で、その地域のいろんな思い出とかを話そうと思ったときに、知らない人には言えないけれども、知っている人にはしゃべっちゃう、ということが出てくるので、そういう意味では、同じ人たちが行き続けることは重要だと思います。これはアーカイブの話だけではなくて、その市史編さんとかをやろうという地域が出てきたときに、地域コーディネーター的な人たちが多分、地域の調査をしたりとか、話を聞かいとイケないと思うのですが、今では地域おこし協力隊など、その地域に所縁の無い人に、その仕事を与えてしまっているところがあって、これをやっていくと、実は深い話というのが残らないのではないか、とやや危惧しています。

アーカイブに限らず、その地域の情報を吸い上げる、あるいは現地でヒアリングするには、同じ人が長期的にそこに入って信頼関係を築き続けるところから始めるのが重要だと思います。そのあたりの意識が、一番重要だと思います。

大江 ありがとうございます。そうですね。もうまさに今のお話がそのとおりでして、なかなか落ち着いて聞き取り調査をする、それから地域にどこまで寄り添いながら調査をするのかということはフィールドワークの課題です。例えば、柳田國男の時代の民俗学の調査の在り方への批判の一つに、研究で欲しいデータ、用語だけを集める。そのために弟子たちを全国に派遣して集めていくというデータベース作りのような民俗語彙を集めたり、事象を集めたりするやり方では、生活の総体がわからないというものがあります。その批判の中で、地域の民俗誌ですね、生活史を記録に残していこうという研究が進みました。1980年代、90年代には各大学にサークルがあって、サークルの人たちが合宿で集落に入って、報告書（民俗誌）をまとめています。しかしながら、行政の文化財調査と同様にも基本的に単年度で終わるものです。

ただ、宮本常一であったり、優れたフィールドワーカーといわれる民俗学者、ご存命の方だと近畿大学名誉教授の野本寛一先生（『野本寛一著作集』Ⅰ～Ⅴ、岩田書院、2004～2017）などは、一つの土地に、ほぼ住み込みながら調査を行い、外部の目で見、記録化しておられます。自治体誌の地域編のように、お住まいの方々が、自らの生活を記録できるようになっていくことができれば、よりいいでしょうし、そういった関わりを持てる調査というのが今はできにくくなって

いるのだけれども、それをきちんとやっていかないといけないところが重要な部分だと思います。

私も、文献も扱いながら民俗調査もしていくのですけれども、今、そういう聞き書き、聞き取り、それから写真も大事なデータで、写真に付帯する情報をいかにたくさん残していくのかという部分というのは、100年、200年、300年先に残していく歴史学の古文書に当たるようなものを、今、まさに作っていく、民俗調査はそういう営みだと思います。歴史学は基本的に現代に残されている史料の読み解きと保全、保存をしていくのだけれども、記録を将来に残していく作業なので、何をどう残すのか、どう言語化していくのかというときに、いろんなフィルターがかかるところを、いかにどうやっていくのか。

本当に二次創作をしたものが、地域の伝承となって文化財になっているものもいっぱいあります。でも、それも50年、100年たてば一つの伝統文化につながっていくというところがありますので、そういった日々の営みの在り方、方法論を、本当にコロナで途絶えている部分を、さらに、今後、少子高齢化の中で、きょうのテーマの「村じまい」、つまり村を廃村に追い込まれるようなところをきっちり残していくっていうことは、もう現在のわれわれに残されている大きな作業で、それは研究者だけではなくて、皆さん方、いろんな方々が関わりながらできるような仕組みづくりというのが今後大事になってくると考えているところです。

まだまだいろいろとお聞きしたいことがたくさんあるのですけれども、本日のシンポジウムをきっかけに、それぞれきょう来ていただいている方も現場をお持ちだと思いますので、そのところでまたブラッシュアップをかけられて、お二人の先生がたの取り組みも、また次の機会にお聞かせいただくことも含めて考えてまいりたいと思います。短い時間ではございましたけれども、本日のシンポジウム、ディスカッション、ここまでにしたいと思います。

最後に、神戸大学副学長の奥村弘先生から、ごあいさついただきたいと思います。お願いいたします。

**奥村** 神戸大学の奥村でございます。現在理事・副学長ですが、私自身は人文学研究科で地域の歴史遺産の保全や、その活用の問題を長年扱ってきました。

本日のお話ですが、もう一度、当たり前のことですが、確認しておく必要があります。歴史文化遺産がなぜ重要かという、やはりその地域の文化をつくったり継承したりしていくということのためにあるということです。それ以外のことは結果として起こることであって、歴史文化がないと、その地域がもたない、それぐらい文化の問題は重要なことが分かってもらえるかどうか根幹ではないかと思っています。再度確認をしておきたいと考えています。



それで、その場合、歴史文化を活用するのはどうしたらいいかというのが、今日のお話だったということになるかと思います。もう一つ考えなければならないのは、過疎の問題と歴史文化の問題をどう考えるかということです。これをどう考えるかなんですが、地域の記憶を歴史として継承していく、歴史文化として継承していくというときに、例えば今年は阪神淡路大震災 30 年ですが、その記憶をどう継承できるのかという話をしたときに、なかなか記憶を継承しにくということがいろんな所で言われたのはご存じかと思います。つまり、記憶を継承していくときの困難さというのは別に過疎地だけに起こるわけではなくて、どこでも起きる、人がたくさんいる都市でも起こるわけですね。

そういう意味でいうと、都市であろうが過疎地であろうが同じような課題を現代社会の中で持っているのだというふうに思います。

では、過疎地域の問題は何なのかというと、過疎地は一気に継承が困難になる状況を生み出している場所なのだろうと思っています。災害時に地域歴史遺産の保存活用を長くやってきましたけれども、同じように大規模な災害起ると、その地域の文化遺産が物理的になくなりコミュニティも破壊されたりして記憶が継承できないということがあるわけですね。それに対応しているいろいろなことをしてきましたが、同じように過疎の問題というのは、急激に記憶の継承が困難になるような状態が発生して、何らかの手を打たないと文化の継承もできないということが起こってきている事態だと思います。人がいなくなるという根幹的な課題なので。

そのときに、今日のお話で重要なのは、やはり地域で、割合狭い範囲で、例えば近世の村のような幅で考えたり、集落という単位では考えるのですが、歴史的に考えたら、そんなに狭いところだけで生きているわけではないのではないだろうという気がしています。

例えば富士山が爆発して、地域のその辺の周りの村が全部つぶれていくのですけども、その時に 1 戸ずつ村が回復するわけではなく、大体 50 戸ワンセットになって、入植していくわけですね。その入植の過程は、幕府がそれを支えるようなインフラの整備をするわけで、そこに見えている集落は 20 戸とか 30 戸しかないように見えたりもするところも、現実には、その全体の構造としては、もっと広い領域でもって再生産が可能になっていることのほうが圧倒的に多いのだと思います。

今日出てきた鉾山町なんかはもっと巨大で、恐らく世界の資本主義の構造と結び付いた銀というような問題が、そこで集中的に銀が採れるから、人が増えるということになるので、構造転換して資源がなくなれば、過疎になって行くという問題と関わって出てくる話だろうと思います。だから過疎地の話っていうのは決して、われわれにとって別世界の話じゃないのだと思うんですね。

ご指摘のとおり、それはわれわれの地域の一部を構成していて、その記憶がなくなっていく事態が急激に今の日本社会で起こっている。これをどうするのかという話だと思うので、このテーマは特別に重要であると考えます。私たち大学にいる人間としては、組織的な手を打つ必要があって、それをどういうふうにつくっていくかということが課題だと思います。

そのやり方は、多様であって、きょうもお二人の方々の報告でいろいろなやり方があるなど思いながら勉強させていただきました。地域の方々の中でやられていることもありますし、それから大学と地域の中でやられていることもありますし、それから高校や小中高の先生方が積極的にやられていることや、豊かな事例が本当にたくさんあるのではないかと考えています。今日もその一端が報告されたと思いますので、この会は、それを皆さんで深めていく場所として存在していて、貴重な意味があるかなと考えております。今後もいろんな所の豊かな事例を教えていただいて、それを共有しながら話を進めていければいいなと考えています。本日は長い時間、どうもありがとうございました。

大江 どうもありがとうございました。それでは、これで本日のシンポジウム『生活の記憶をつなぐ』を終えたいと思います。最後まで、どうもありがとうございました。

(了)

---

〔おおえ あつし 日本古代史・民俗学〕  
〔いのうえ まい 日本中世文学〕  
〔ふじもと ゆう 文化情報学・地理情報科学〕